

私塾（蔵春園）を創設

恒遠 醒窓



ID 0034380

京築地方には、幕末から明治にかけて二つの私塾があった。上毛郡薬師寺村（現豊前市）の蔵春園と京都郡上稗田村（現行橋市）の水哉園だ。

蔵春園を開いた恒遠醒窓は、享和三年（一八〇三）生まれ。文政二年（一八一九）十六歳の時、日田の広瀬淡窓の私塾・咸宜園（かんぎえん）入門。

五年間学び、塾頭（塾長）を務め、文政七年（一八二四）、二十二歳の時、長崎に遊学したあと、帰省して薬師寺村で私塾・蔵春園を開いた。文久元年（一八六一）逝去。享年五十九。生前、漢詩集『遠帆楼詩集』二巻を出版している。

恒遠醒窓は村上仙山より七歳年上で、仙山が水哉園を開いたのは蔵春園開設の十一年後のことである。

蔵春園での学習は、素読、輪読、講義、討論会、独見会（研究発表会）、作文、詩作などだった。学級は十級に分け、まず、十級から出発し、学力の向上に伴い進級させた。毎月の試験結果は全員分が発表された。これらは咸宜園の制度を見習った。

たもので、仙山の水哉園の制度ともよく似ている。

蔵春園は、醒窓の没後はその子精齋（せいさい）が継承し、明治二十八年（一八九五）まで七十年間続いた。塾生は九州をはじめ西日本各地から三千人にのぼり、優れた人材を輩出した。

醒窓の安政六年（一八五九）の日記に「村上仙山来訪」とある。醒窓五十六歳、仙山四十九歳の時である。

醒窓には六歳年下の弟、西秋谷（にしあきや）がいた。彼は日田咸宜園入門。塾頭を務めた後、長崎で蘭学を、熊本や京都で医学を学び、小倉藩医の西董庵の養子となった。秋谷は藩主の侍医を務めたが、明治二年（一八六九）、五十四歳の時、豊津育徳館内に開かれた医学寮の教頭に就任。この時から明治十二年に仙山が没するまでの十年間、秋谷と仙山の詩のやりとりは続いたという。秋谷は医学者のみならず漢学者、漢詩人としてもその名を知られた。

（村上仙山・末松謙澄顕彰会 山内公二）